

日本における Palmer と神戸女学院

原 田 園 子

Summary

Palmer and Kobe College

Sonoko Harada

Harold E. Palmer's arrival in Japan in March, 1922, marked the beginning of a new trend in English language teaching in this country. His visit was to do research on and to reform English language teaching at Japanese middle schools in accordance with the purpose of the invitation from the Ministry of Education. His extensive and intensive activities in propagating his Oral Method soon aroused the interest in this new method among the people in this profession and much more among foreign teachers in Japan, one of whom was Miss Mary E. Stowe, head of the English Department at Kobe College High School at that time.

The first part of this paper reviews Palmer's activities during the fourteen years of his stay in Japan, most of which were done at the Institute for Research in English Teaching, established in 1923 having him as the president, and through *The Bulletin*, and describes what his advocacy was and how it became modified in the course of his vigorous popularization activities through lectures, teacher training, and publications including textbooks to materialize his theory and method for teachers to practice it at Japanese schools.

The second part of this paper traces contact made by Kobe College with Palmer and his theory and method during his stay in Japan, and tries to prove an original influence of the new method on English teaching at Kobe College High School through Miss Mary Stowe and other teachers of English by pointing out the records found in *The Bulletin* and *Megumi*. (How Palmer's theory and method was realized in Miss Stowe's teaching, tracing Palmer's influence on teaching materials developed by Miss Stowe, will be discussed in the next paper.)

This paper is the fourth section of the third chapter of "English Language Teaching at Kobe College: A Historical Review in the Light of English Teaching in Japan and Foreign Language Teaching in Europe and America."

序

神戸女学院第5代院長 Charlotte B. DeForest (院長在任 1915—1940) が著した英文の神戸女学院 75 年史, *The History of Kobe College* (1875—1950) に次のような記述がある。

日本の学校における英語教育は、長い間話すことよりもむしろ読解のためのものであった。従って多くの日本人学者は、難解な英文を読むことができるが、簡単な英語を聞いて理解するための訓練や正確な発音で英語を話すための訓練は受けていない。このような学校教育における実状を改善する目的で、松方幸次郎氏の資金援助によって文部省は、英語教育にオーラルフォネティック教授法を応用すべくロンドン大学のハロルド・パーマ教授を招聘した。パーマ氏は教員研修会を開催したり、英語で思考することを教えるために必要な教科書の作成によってこれを効果的におこなった。高等女学部の英語科主任のメアリー・ストウ女史は、この教授法を高等女学部に応用し、発展させるとともに日本人教師やアメリカ人教師を訓練した。¹⁾

神戸女学院中学部における英語の教授法は一般に oral method とか direct method として知られている。中学3年間は、市販の教科書を使用せずに独自の教材で、日本語を用いずに英語だけによる授業がおこなわれている。絵や実物、ミニチュア、動作等を補助教材として話し言葉の運用力を養成する。特に入門期の中学第一学年第一学期の前半は、アルファベット文字は導入しないで発音記号を教え、これを使って正しい発音習得と記憶の助けとしている。現在の形の教授法と教材は、Angie Crew 女史 (在職 1930—1964) が作り上げたので、学院内部では Crew Method とも呼ばれている。この Crew Method の基礎を築いたのが、上記の Mary E. Stowe 女史 (在職 1910—1952)²⁾ であった。

本稿は、当時“新教授法”と呼ばれた、Harold E. Palmer が日本で説いていた彼の語学教授理論と方法論がどのようなものであり、日本の中等学校での英語教育の改善を目指してどのように応用されるべきかを、どのように説いていったか、の経過をたどり、これに神戸女学院が、Mary Stowe 女史を中心とした英語教師達が、どのように接したかを残されている記録に探っていくものである。³⁾

Palmer

1922年3月文部省の顧問として来日した Palmer は日本の英語教育の改善を託されていた。滞在予定は3年間であったが、その期間はあしかけ15年に延長され、その間日本各地で講演、

実践指導、公開授業そして教材作成等の新教授法の普及の努力を活動的におこなった。その概要が95頁の付表である。

同年5月から中等学校英語教員のために週2回“Modern Methods of Language Teaching”と題する連続講演を東京帝国大学でおこなった。その内容は前年イギリスで出版された彼の2冊の著書 *The Principles of Language-Study* と *The Oral Method of Teaching Languages* の要点であった。⁴⁾ これに加えて日本語の音声と比較しながらの英語の聴き取りと発音練習が参会者になされた。⁵⁾

同年7月には、大阪外国語学校で開催された6日間の講演会の講師の一人として“Lectures on the Study and Teaching of English with Ear-Training and General Practical Work”の演題で講演した。ここでも英語の話し言葉を教えるための理論と方法論、彼の Oral Method について話し、実践練習もおこなわれた。⁶⁾

翌1923年のPalmerの講演活動は北海道から九州にわたっておこなわれている。12月の帝国教育委員会での講演“Teaching of English in the Light of a New Theory of Linguistics”は、来日以来、日本の各地での視察や講演、英語教育関係者との話し合いをしながら彼がまとめたこれからの日本での英語教育が基づくべき理論と方法論を述べたものである。日本の英語教育改善を目指しての議論は、先ず“language” “speech” “primary/secondary speech” “speech habits”等の概念を明確にすることによって始められなければならないとし、これらの概念を解説し、これに基づいた最も有効に時間を使い、効果的に改善の成果を上げ得る教授法の概略を述べている。⁷⁾ この内容が更に詳しく説明されているのが1924年3月に出版された *Memorandum on the Problem of English Teaching in the Light of a New Theory* である。言語は運用の側面と体系の側面があり、語学教授は運用としての言語を習得させることである。また、語学教授は最新の心理学の研究成果によって明らかになった学習心理に基づいておこなわれなければならない。言語運用力の養成は、言語習慣をつけさせることである。言語運用の習慣は第一次運用のもの(primary speech habits)と第二次運用のもの(secondary speech habits)とがあり、話し言葉運用習慣の前者は音声の観察(oral observation)、口頭による模倣(oral mimicry)、口頭による機械化(oral mechanizing)、聴覚像と意味の融合(fusing acoustic image and meaning)、言語材料の文への構成(composing derivative speech material)、口頭による刺激への即座の応答(immediate reaction to oral stimuli)、の6段階があり、これらの習慣の形成は聴き取り(ear-training)、聴き取ったことの発声(articulation)、繰り返し(repetition)、再現(reproduction)、入れ換え(substitution)の練習、命令文に応ずるドリル、会話等によって達成されることが説かれている。加えて、語学の学習/教授の過程に於いて留意すべき、意図、学習の時間と労力の経済性、進歩の順序、漸次性、配分、興味、具体性、正確性の8項目が挙げられている。これらは、上記の1921年出版の彼の2冊の著書で述べられていたことでもある。

1924年7月出版の *Systematic Exercises in English Sentence-Building* は、このテキストの序にPalmer自身が書いているように、口頭練習が中心の授業に欠ける文法・文型の系統だっ

た練習と、文法中心の授業に欠ける口頭練習とを補うべく作成されたもので、2巻にわたって基本句型表と語の入れ換え (substitution) 表が、易から難に配列され、50 ずつ載せられており、各表を基にした置き換え (replacement) や配列換え (arrangement) の練習問題の例が示されている。このテキストは発音記号を使った発音練習と機械的な口頭練習が終った時、つまり学習の2年目に入る頃に導入されるべきものであるとし、第一次運用習慣の第5番目の段階である、無意識的に無数の文を構成する習慣を形成し、発展させる助けとなるものであるとしている。

同年10月17日、18日の両日、Palmer が所長となり前年5月に創設された英語教授研究所の第1回全国英語教授研究所大会が開催された。この大会における主な議論の主張は、日本人学習者の英語学習の最終目標は英語の読解力をつけることであるが、この目標に到達する最も有効な手段は音声学に基礎をおいた oral/direct method によることの認識であった。発音を教えるには音声記号を用いるのが最も有利であり、speaking, oral understanding, writing, reading と続く技能習得は一連に、そして自然になされるもので、訳読や訳解によって英語を学ぶことは、自然な英語の習得にはつながらないことが説かれた。この大会で、Palmer は“An Appeal for Precision in Discussion”の演題で、英語教育の改善にあたって、言語の研究が進んできた今、この分野における用語の古い概念を改め、新しい概念を共通に確認し、議論、主張、批評等において用語はこの新しい概念で使わなければならないという、先に帝国教育委員会で述べたことを参加者である英語教師、英語研究者に繰り返している。この大会で、青山学院教授で Palmer の協力者であった James Victor Martin (1875—1962) による thinking in English の授業実演がおこなわれた。

1925年3月、娘 Dorothée との共著による、英語学習の入門期である中等学校第一学年に direct-oral method を使って教える方法を具体的に示した *English Through Actions* が出版された。英語を聞いてそれに動作で応える等の練習によって、話し言葉の理解力を養成する方法 (oral ostensive line of approach) が教案化されて例示されている、教師用のテキストである。この書の始めに、欧米における改革運動の経過と direct method についての解説、direct-oral method によって教える際の技術・工夫が書かれ、ドリルの種類と具体的な例が数多く示されている。

19世紀末より始まった語学教育改革運動における言語学、語学教授理論、方法論の新しい研究の成果を日本の英語教師や英語学者に紹介するために、英語教授研究所が“Language Study Library”を発行することになった。1925年5月、これの第一巻として *Concerning Pronunciation* が出版された。正しい発音、悪い発音の説明、正しい発音習得の障害は既に身に着いた悪い習慣であること、正しい発音を目指す意志の欠如、信頼できる資料の欠如、学習者の母国語と外国語の文字の問題、間違った資料や情報等であることが述べられ、日本語の発音と言葉を例に使い比較しながら、日本人にとっての英語の正しい発音習得上の困難点を解説し、その克服への指導の仕方が説明されている。この書は次に述べる夏期講演会の参加者に配られている。⁸⁾

同年8月軽井沢で開催された英語教授研究所主催の講演会の講師の一人であった Palmer は、予め準備してあった発音学についての模擬討論で、質問者を演じた J. V. Martin 等を相手に英語学習の初期における正しい発音の習慣付けの重要性と、そのための発音記号の学習の有効性を説いている。⁹⁾

同じ8月に発音記号の原理、その歴史、様々な発音表記法の問題点や有効性、英語の音、音声記号を解説した *The Principles of Phonetic Notation* が出版されている。同年9月、*Progressive Exercises in the English Phones* が出版された。この書は特に日本人学習者のための、日本語の音声との比較をしながらの、段階を追った41課で構成された英語の発音練習のテキストであり、発音教授法の解説書でもある。日本語の発音はカタカナで、英語の発音は音声記号で示されている。先ず全般的な日英語の発音の違いと、指導法の解説があり、各課ではその課で扱う英語の音が、それに近い日本語の音との相違点や類似点を挙げながら、日本語の単語も使って説明されている。

同年11月に開催された第2回全国英語教授研究所大会で Palmer は “The Present Situation Regarding Reform” と題する講演をし、日本の中等学校における英語学習の目的は英語を手段として知識を得ること、語彙は最大限5000語とする、語学学習に必要な五つの習慣¹⁰⁾を形成する、作文力養成は段階を追った direct method で、読解力は oral-direct method で学習しはじめることによって、正しい発音は音声学理論に基づき音声記号を使った系統立てた聴き取りと発音練習によって最も容易く効果的に習得できる、という英語教授改善のための6原理 (the six chief reform principles) を挙げている。更に、この原理が日本の英語教育改善のために実践されるための対策として、教員研修、教員の資格テスト、教材の開発、上級学校への英語の入学試験の改善がなされなければならないことも述べている。¹¹⁾ この大会でも J. V. Martin が上記の *English Through Actions* にある action chains の授業実演をおこなっている。

翌1926年10月の第3回大会では、日本人教師によるやはり *English Through Actions* にある free oral assimilation のためのドリルの授業が公開されている。

Palmer の論文 “The Five Speech-Learning Habits” が1927年2月発行の *The Bulletin* No. 30 (?)¹²⁾ の付録になっている。これは上記の *Memorandum* の一部を発展し論文にまとめたものである。言語運用力をつけるために形成しなければならない習慣を、耳による観察 (Auditory Observation)、口による再現 (Oral Imitation)、口馴らし (Catenizing)、意味付け：聴覚像の意味の理解、聴覚像と意味との融合 (Semanticizing : identification, fusion)、類推による文の構成 (Composition by Analogy) の5段階の習慣に分かりやすくまとめたものである。この付録には、34頁のこの論文に加えて、同じく34頁にわたる、これを読んで理解した内容を読者が自らチェックする5課に分けられたテスト形式の問題が別につけられている。

1927年3月発行の *The Bulletin* No. 32 の付録として、Palmer と英語教授研究所が主唱する理論と方法論が誤って受け取られていたこともあって、それに対処するために書かれた論文 “The Reformed English Teaching in the Middle-Grade School” が配布されている。提唱さ

れている改善策は、何も発音記号の採用だけを、話し言葉としての英語だけを、完全な oral method による教授を、翻訳や日本語の絶対的な排除を唱えているわけではなく、読み書き、文法、作文や文学を軽んじているわけでもないこと。文部省の要請で来日し、日本での英語教育の現状を観察し、当時日本でおこなわれていた改革運動の試みを見て、統一した改善運動の必要性を感じ英語教授研究所の設立となったこと。この研究所に寄せられた様々な意見や提案、英語教師の力量、入学試験、英語教育制度等の問題を十分に考慮しての改善活動である。これらのことを述べて、ここでもまた日本の中等学校での英語教育の目標とそれに向っての方法論について従来の主張をまとめ解説している。

同年7月軽井沢講習会で Palmer は “The Teaching of English in Japan” と題する講演をし、日本の中等学校での英語教育の実状は上級学校への受験のためのものになっており、生徒たちは真の意味での英語の教育を受けていない、ことばを習う本来の方法で教えられていないと述べ、最終目標である英語を知識修得のために読み、正確に書くことを得させる教授をすることを勧めている。目標達成への基本としての5段階の習慣形成、教え方、参考文献、テキスト等についての助言もしている。¹³⁾

同年8月の “What to Do and What Not to Do” は oral-direct method である新教授法を採用しようと考えている英語教師への助言である。この新教授法による英語教授の目指すところは旧来的方法論と同じく最終的に読解力をつけることであり、異なる点は目標に学習者を導く過程が、新しい学習活動によるものである、ということが述べられ、この新方法で教えようとする際の心構えや、教師が確信をもって選択し留意しなければならない点を示唆している。この論文にも5段階の習慣形成がまず不可欠なことであると述べられている。¹⁴⁾

この年の10月には第1回英語教師研修会が東京で開催されており、Palmer は “Modern Language Teaching” の題で連続講演をしている。ここでも同様に、日本の中等学校での英語教育の目標は、英語の読解力と正確な作文力を養成することであると述べ、これに達するには適切な、段階を順に追った教科書を使用しなければならず、またこれを連続した4段階で教えなければならないとしている。先ず新教材を教師が説明しながら音読する。この段階では教師は出来るだけ多く英語を使うようにするが、日本語は完全に排除されなければならないのではなく、有効である場合には使っても良い。次に教科書を閉じさせて、答とその答え方が間に示されている簡単な英問答を多くおこなう。これは頭の中での翻訳の習慣をつけさせないようにするためのものである。次の段階では生徒に音読させる。この時には生徒が読む教材には知らない語や表現が無いように配慮されている。最後に作文練習をするが、これは前の三つの段階を通して既に慣れ親しんだ教材についてのものになる。入門期の最初の3ヵ月程は、英語による集中問答をおこない、正確に聴き、再現する正しい習慣をつけさせる訓練のために費やしても良いことも述べられている。¹⁵⁾

この研修会に続いて開催された第4回全国英語教授研究所大会でも Palmer は同様のことを “The Reformed English Teaching” の題で講演している。

1928年7月に開催された文部省主催の夏季講習会での講演も新教授法についてのものであ

る。新教授法は音声学や oral method だけを意味したり、practical English だけに重きをおいて読解や文学を軽視したものではなく、最終目標はあくまでも、ひろく読む力と正確に書く力であって、この目標達成のために、中学5年間の英語学習を組織的に進め教えていくものである、という従来の主張を繰り返し、続いて学習/教授の進め方を述べている。最初の3ヵ月はおもっぱら oral method によって教え、次に oral work を続けながら口頭で学習した教材を使って読みを始め、その次の段階で同じ教材で作文と文法を導入していく。このように同一教材を三方から教えていくことは、三重の強化 (triple reinforcement) になり効果があがるのであるとしている。音声学の知識や音声記号については、3ヵ月の oral work が終り読みに入る前に導入し、あまり専門的になりすぎないようにして、各授業の始めに5分位ずつ教えるのが合理的であるが、欠くべからざるものではないとし、重要なのは英語で思考すること、思考の聴覚像 (acoustic image)、であるので、正しい発音を多く聴かせ再現させることが大切であるとしている。¹⁶⁾ この頃には、Palmer は英語学習において発音記号は必須なものであるという主張をしなくなっている。

このように、1927年～1928年を通して、Palmer の理論と方法論は、日本における英語教授/学習の場の現実を背景に、精練されてほぼ最終的なまとまりに達していった。

同年10月の第5回全国英語教授研究所大会で、Palmer は同研究所が過去一年間におこなった発音指導用のレコードの吹き込み、語彙の研究、機構的文法 (mechanism grammar)¹⁷⁾ の研究の成果を報告した。

1929年3月 *The First Six Weeks of English* の日本語版『英語の六週間』が出版された。¹⁸⁾ これは、英語を初めて習う中等学校第一学年の最初の授業を oral method でおこなうやり方を示した第1課～第35課までの教案である。読解力と作文力をつけるための最短で最も効果的な学習法は先ず話し言葉の運用力を修得し、英語で考える力をつけることであるという新教授法の主張に基づき、最初に聴き取りの力をつけるための訓練 (ear-training) と英語を音声で発する (articulation) 練習をおこなう。学習者に先ず英語 (すなわち言語) は伝達の一手段であるということを体得させるために、組織的な発音練習と文の構成練習を学習の最初にはもってこない。また、英語 (すなわち “ことば”) は口頭による伝達の手段であることも認識させるために、文字や綴りもこの時期には避ける。翻訳も避け、目で見て理解できる実物を用いたり実演・動作で教え、英語で考えることをさせる。従って教材の厳密な選択をしなければならない。これらのことに加えて、教材やこの方法で教える場合の技術が、はじめに書かれている。

この書の第一週目の部分に解説を加えたものが「英語の第一週」と題されて1929年4月に発行された *The Bulletin* No. 53 の付録として配られている。この教案で英語学習の手ほどきを試み、第二週目からは、引き続き『英語の六週間』を使って進むことが勧められている。更に、第30課が終って読みを導入する時に、最初の30課にでてくる言語材料だけで書かれた、英語教授研究所が編纂した読本教材を使えば、生徒がそれまでに習得したことが確実に定着するのであると説かれている。

同年10月の第6回全国英語教授研究所大会で Palmer は、幻燈を使って図解しながら学識

としての文学と言語科学としてのことばの関係や、文学研究と言語研究の相互依存性について語り、続いて研究所がおこなっている、言語研究の一領域である、語彙選定の研究における留意点等を述べている。

翌1930年の第7回大会でも語彙選定の研究が報告されている。

1931年5月、Palmerは大阪府教員会主催の住吉中学校で開催された教員研修会で *The First Six Weeks of English* を使った6回の授業実演をしている。

1932年10月に開催された英語教授研究所主催の講習会でのPalmerの演題は“*The Fundamentals of English Teaching*”であった。語学学習における二つの過程、すなわち、表象である語句の示す意味の理解 (identification) と、瞬時にその語句が使える程度にまで語句とそれが示す意味との結びつきが密接になる融合 (fusion) について話し、“理解”は旧来の教授法で導き得るが、“融合”に到らせるには、direct method によらなければならないことを述べている。Direct method では明示する (ostensive) 方法と文脈上で示す (contextual) 方法の両法で学習者が頭の中で表象とその意味の融合をするように導くのである。¹⁹⁾ その他、研究所がおこなっている、英語教授を効果的にするための連語法や構文の型の研究について語っている。

1934年2月発行の *The Bulletin* No. 101 に、Palmer が来日以来英語教授研究所において説いてきた新教授法が基づいている、言語学、心理学、語学教授理論の見地からの、語学教授/学習において守るべき原則を公理10条にまとめた“*Ten Axioms*”²⁰⁾ が発表された。(1) 言語は言語記号で成り立っている。(2) 言語は言語体系と言語運用としてみなされ扱われる。(3) 語学学習は心理学の見地からは、言語記号の意味の理解“identification”と同時に、言語記号とその意味の結びつきが瞬時に思い浮かべられるように両者を融合“fusion”させることである。(4) 言語教授方法論の見地からは、第一次運用と第二次運用の技術を発達させることである。(5) 第一次運用のものは、聴き取りの技術と、聴いたことを口頭で模倣する技術で、(6) 第二次運用のものは、読む技術と、書く技術である。(7) 翻訳の技術も第二次運用のものである。(8) 発音は言語の必須要素で、個別の言語における音と、それらの音の配置が関係する。(9) 文法も言語の必須要素で、法則に従って文を構成することにかかわる。(10) 語彙はある程度の数を先ず完全に習得することが、続く学習への備えになる。これらの原則に基づいて教授要目が作られ、さらに教授手順が定められていかなければならないとしている。

Palmer の約15年間の日本滞在中の活動をみると、その初期には、*The Principles of Language-Study* や *The Oral Method of Teaching* にみられる語学教授理論と方法論の普及を目指した講演活動が中心であり、その間日本の各地での中等学校における英語教育の現状の視察と分析がおこなわれ、滞在中期には、日本の学習者の最終目標である読解力と作文力習得に導くために不可欠な過程としての speech 習得の必要性、そしてそのための oral-direct method の必然性を説く精力的な活動がおこなわれた。同時に、彼の説く新教授法の日本の学校での実践のためのテキスト作成と、具体的な教え方の指導がおこなわれた。これらの活動を通して来日以前の彼の理論、方法論が凝縮、明確化され、また、具体的な教授法と、発音記号使用や翻訳の問題に関する彼の考えが、日本の実状に即するように変わっていったのであった。滞日の

後期には、教材作成の基本になる、語彙選定や基本構文選定の研究に従事するようになった。1934年発表の“Ten Axioms”は、来日以前の研究成果に根ざし、これに日本における活動、研究と実践の成果が加えられた、彼の理論の集大成から引き出された要約と言えよう。

以上のような Palmer の滞日中の活動とその主唱する英語教授理論と方法論が、同時期に Mary Stowe 女史によって神戸女学院の英語教育に導入、応用されていったのである。次にその過程を、残されている記録にみていく。

神戸女学院

『めぐみ』新第31号(1937年12月発行)に掲載されている同窓生の便り「十年・十五年一昔なつかしき思い出集」²¹⁾に次のような断片がある。

はじめて英語を教わったので印象深いミスメリーストウ。

(44回生 松田(北上)芳子氏)

A・B・C、一つも知らない時にメリーストウ先生じきじきに教へて頂いて家で一切英語を習ってはいけませんの約束で何にも分からず「ホワッチャネエー」(What is your name?)と云われた時にはどうお答えするかと云ふ事もずいぶん後になって分かり...

(44回生 寺澤(田中)栄子氏)

これによると、同窓44回生は高等女学部入学の年が1922年であるので、Palmer 来日当時には、Mary Stowe 女史は高等女学部第一学年の英語を担当していたことが分かる。

1924年8月に出された「神戸女学院第49年報 大正12-13年」(1923-1924)²²⁾に次のような記録がみられる。

ヘラルド・パーマ教授が講演や氏の実験発表やにより一般日本人を英語教授法に注目せしむるように至ったのに動かされ、我が英語科も己が部を反省精査するところあり...。十二年前ミスメリーストウが英語科の主任となられて...。今日は...ミスエム・ストウに女学部の英語、語学科の主任として務めていただいで居ります。

学院内部の記録に Palmer の名がみられる最初のものである。

翌1925年8月の「神戸女学院第50年報 大正13-14年」(1924-1925)²³⁾には次のようなことが書かれている。

ミス・ストウ女史姉妹の御帰院と共に英語科は新らしく刺激されました。ミス・メリー・ストウは高女部でパーマ教授の考案の発音学的、会話的方法を試みられ...

Palmer の新教授法と Mary Stowe 女史の結びつきを示す学院内部の最初の記録である。

これらの記録によると、新教授法が神戸女学院に導入され始めたのは 1924 年頃であることが分かる。また、1910 年に着任した Mary Stowe 女史は、1912 年から学院全体の英語科の主任を勤め、1924 年頃には、高等女学部の英語科主任、つまり中等教育部門の英語教育の責任者であったことも確認できる。

1924 年 2 月発行の *The Bulletin* No. 3 に載っている英語教授研究所会員名簿に Mary E. Stowe と、当時神戸女学院に在職中の Eleanor Burnett, Mabel Field の名前がある。

Palmer は、先にみたように 1922 年 3 月に来日し、その年の 5 月から講演活動を始め、7 月には大阪での最初の講演をしている。1923 年 5 月には、英語教授研究所が開設され、翌 6 月には研究所の機関誌 *The Bulletin* が発刊されている。上記の記録にある 1923 年～1924 年にかけての神戸女学院の英語教育に関する“反省精査”ということから、学院でもこの頃から Palmer の新教授法に関心を抱き始めていたと察せられる。しかも 1923 年 8 月から 1924 年 11 月まで Mary Stowe 女史は休暇で帰米していた事実があり、この間女史が日本に居なかったことにもかかわらず、1925 年 8 月発行の年報には、つまり 1924 年 9 月～1925 年 7 月の間に、その新教授法が学院で実際に“試みられ”たとの報告がされているので、女史をはじめとする学院の英語教師達が Palmer 来日当初の大阪講演を聞いたり、いち早く研究所の会員となる²⁴⁾等して oral-direct method 実践のための研究が、Palmer 来日後のかなり早い時期から始められたと考えることができる。

The Bulletin No. 17 に掲載されている 1925 年 8 月 10 日～14 日に英語教授研究所主催で開催された軽井沢講演会参加者名簿に Mary Stowe 他、当時の学院の英語教師 Grace Stowe,²⁵⁾ 西村まさ、曾木喜久の名がある。この時の講演会参加については学院内の記録には残されていないが、先にみたように、これの参加者に Palmer の *Concerning Pronunciation* (1925 年 5 月発行) が配られたのであるが、奥付に“大正十四年(1925 年)五月二十日発行”とある一冊が、現在、中高部英語科に所蔵されている。これは、この時の講演会で得たものとも察せられる。

やはり、先にみたように、この講演会で演じられた、発音学についての模擬討論会で、Palmer によって、英語学習に、正しい発音の習得に、発音記号導入の有効性が述べられている。Mary Stowe 女史等のこの講演会参加が、神戸女学院の中等教育部門での英語教授法に、特に、入門期に発音記号を導入することに、大きな影響を与えた一つのきっかけになったと考えられる。

1926 年 5 月発行の『めぐみ』新第 6 号に、「本院講堂に於て英語講習会を開催す。講師は東京青山学院教授マアテイン氏」の記録がみられる。“マアテイン氏”とは James Victor Martin のことで、英語教授研究所設立当初より Palmer を助け、前述のように研究所の大会で Palmer の示唆した教授方法で公開授業を度々おこなっていた人物である。この時の英語講習会について同誌 17 頁に次のような記事もある。

3月30日から4月3日まで5日間、本院に於て英語教授法改善のため講習会を開いた…。来会者は主として京阪神の中等教育に従事されている方が80名…。その権威ある講義は、まだ英語を学んだことのない新入一年生20名をもって試みられた教授法の実演と相俟って、来会者に多大な興味と満足とを与えた…。

3月末から4月初めにかけての講習会での授業実演であるから、高等女学部“新入一年生”は、記事どおり、英語に関して全く白紙の状態、新教授法によって、英語学習の最初の手ほどきを受けたことになる。この後どのように一年生の英語の授業が続いたかの記録は無いが、先にみたように、既に1924年には新教授法での“試み”があったので、この方法論に沿ったものが続けられたと考えても良いと思われる。

The Bulletin No. 39の付録である第4回全国英語教授研究所大会(1927年)の記録に、交歓晩餐会で「神戸女学院のミス・ストウの談話があって…。」の一行がある。²⁶⁾ 学院にはMary Stowe女史のこの大会への出席の記録はないが、これによって、女史はこの大会に出席し、この時のPalmerの講演“The Reformed English Teaching”で、先にみたように、学習の最初の3ヵ月程の間におこなう英語による集中問答の重要性が述べられるのを聞いたことが察せられる。

1929年7月発行の『めぐみ』新第14号に「2月25日(月)文部省囑託パーマ教授来院視察」の一行が記されている。

1930年2月発行の『めぐみ』新第17号に、「6月27日メリー・ストウ先生英語教授法研究のため夜行列車にて東京青山学院へ出張」とある。青山学院は、上記のJ. V. Martinが教えている学校であるので、新教授法の授業参観か、講演会への出席と思われる。

同誌に、10月22日に「曾木先生」、10月23日に「M・ストウ、フィールド [Sarah M. Field] 先生東京に於ける英語教育大会へ出席」の記録がある。“大会”は、日付から第7回全国英語教授研究所大会のことであると分かる。

1931年7月発行の『めぐみ』新第18号に、「5月7日(木)午前四校時パーマ氏英語教授法実演、昼パーマ氏『英語教授法に就いて』」の記録がある。因みに、*The Bulletin* No. 74の記事によると、Palmerは5月4日～6日に開催された大阪での教員研修会において、住吉中学校で公開授業をおこない、その後、大阪近辺の数校でも公開授業と講演をした、とあるが、この二つの記事に記されている日付から、そのうちの一校が神戸女学院であったことが分かる。

1932年12月発行の『めぐみ』新第21号に、10月14日「保田〔保田 正〕先生今明日東京市政会館における英語教授研究所大会へ出張」の記録がある。第9回全国英語教授研究所大会(10月14日～15日)に出席のことである。

1934年2月発行の『めぐみ』新第25号に、「10月18日メリー・ストウ先生本日より3日間東京文理科大学における英語研究会へ出席」の記録がある。第11回全国英語教授研究所大会(10月18日～20日)に出席のことである。

以上のように、数少ない学院内部の記録ではあるが、Palmerの滞日中に、Mary Stowe女史

をはじめとする神戸女学院の当時の英語教師達が、彼自身が説き語り示す新教授法である oral-direct method にふれ、共鳴し、これを研究しつつ実践していくようになった事実が、これらの記録によって確認できる。

Mary Stowe 女史が Palmer の理論と方法論を実際にどのようなやり方で実践していき、また、やがて神戸女学院の生徒達に即すように作り上げていった教材に、それが具体的にどのような示され、応用されているかを、断片的なものではあるが残されている資料を手がかりに、次稿ではみてみたい。

注

- 1) P. 129 (筆者私訳)
- 2) 1878—1972
1898年にマウントホリヨーク大学を卒業。続いてコネチカット州立師範学校で、1899年～1901年まではニューヨーク州立大学で学び、その後7年間ニューヨーク市、ワシントン、ニュージャージー州エリザベスの私立学校で教師をし、1908年、米国伝道会の日本への教育宣教師に任命され、1910年に神戸女学院に着任した。
- 3) 本稿は「欧米と日本の英語教育・方法論史における神戸女学院の英語教育・教授法の流れ(Ⅲ)」(『神戸女学院大学論集』Vol. 37 No. 1, pp. 53～72)の第3章第4節にあたるものである。
- 4) Cf. 『神戸女学院大学論集』Vol. 37 No. 1, p. 56
- 5) Cf. 『英語青年』Vol. 47 Nos. 7～12, Vol. 46 Nos. 1 & 2
- 6) Cf. 『英語青年』Vol. 47 Nos. 11 & 12
- 7) *Memorandum* Cf. Appendix C
- 8) *The Bulletin* No. 15 に掲載されている夏期講演会の案内に書かれている。(p. 7)
- 9) Cf. *The Bulletin* Nos. 17 & 18
- 10) 先の六つの習慣がここでは五つに整理されている。(詳しくは後述)
- 11) Cf. *The Bulletin* No. 19, p. 4
- 12) *The Bulletin* の復刻版の第7巻「付録・解説」に号数は不確かなものと記されている。
- 13) Cf. *The Bulletin* No. 19 の付録
- 14) Cf. *The Bulletin* No. 36 の付録
- 15) Cf. *The Bulletin* No. 39, pp. 2 & 3
- 16) Cf. 『英語青年』Vol. 60 No. 2
- 17) 辞書や文法書には明確に説明されていない、ことばを使う時に無意識のうちに応用している自然で日常的な用法
- 18) この書は日本人教師達のために日本語で出版され好評を得、次いで外国人教師達からの要望で原本の英語版が1934年に出版された。
- 19) Cf. 『英語青年』Vol. 68 No. 4, *The Bulletin* No. 88
- 20) “Ten Axioms Governing the Main Principles to be Observed in the Teaching and Learning of Foreign Languages”
- 21) PP. 40—44
- 22) 『めぐみ』新第4号付録
- 23) 『めぐみ』新第5号付録
- 24) 英語教授研究所の最初の会員名簿は、開設年である1923年9月1日の関東大震災で焼失してしまつたと、New Series No. 1 となつた同年10月15日号の *The Bulletin* に報じられている。
- 25) Mary Stowe の妹で、在職期間は、姉と同じく1910—1952
- 26) P. 3

参考文献

- DeForest, Charlotte B. (1950). *The History of Kobe College*. Kobe College [神戸女学院 75 年史].
英語教授研究所. *The Bulletin of the Institute for Research in English Teaching*. [復刻版 1985 Vols.
1 ~ 4, Vol. 7] 名著普及会.
『英語青年』 Vols. 44 ~ 76. 研究社.
『語研ニュースレター』 (1987 年 9 月). No. 100.
本城智子 (1981). 「神戸女学院の英語教育」『神戸女学院百年史 各論』神戸女学院.
市川三喜監修 語学教育研究所編 (1962). 『英語教授事典』 東京：開拓社.
Palmer, Harold E. (1925). *Concerning Pronunciation*. 東京：開拓社.
_____ (1925). *English Through Actions*. 東京：開拓社.
_____ (1924). *Memorandum on the Problems of English Teaching in the Light of
a New Theory*. 東京：開拓社.
_____ (1925). *Progressive Exercises in the English Phones*. 東京：開拓社.
_____ (1924). *Systematic Exercises in English Sentence-Building. Stages I & II*.
東京：開拓社.
_____ (第4版 1936). *The Principles of English Phonetic Notation*. 東京：開拓社.
『めぐみ』 新第 2 号 ~ 第 29 号 (神戸女学院同窓会 1921 ~ 1936).

(原稿受理 1990 年 9 月 12 日)

付表：日本における Palmer と神戸女学院

Palmer と英語教授研究所の主な活動	神戸女学院と Palmer/英語教授研究所
1922 T 11 3月 来日 5月 講演(東京)"Modern Methods of Language Teaching"(10回連続) 7月 講演(大阪)"Lectures on the Study and Teaching of English with Ear-training and General Practical Work"	
1923 T 12 5月 講演(小樽)"Modern Methods of Language Study" 講演(東京)"Intonationについて"(8回連続) 英語教授研究所の初代所長に就任(～S11) 6月 講演(京都)"Speech Learning Habitsについて" The Bulletinの編集長となる(～S11) 7月 講演(東京) 10月 講演(福岡)(香川)(徳島) 11月 講演(広島) 12月 講演(東京)"Teaching of English in the Light of a New Theory of Linguistics" T The Sequential Series(全2巻)	
1924 T 13 4月 講演(大阪) 5月 講演(大阪) 10月 第1回全国英語教授研究所大会 "An Appeal for Precision in Discussion" Memorandum on the Problem of English Teaching in the Light of a New Theory T Systematic Exercises in English Sentence-Building (全2巻) T Thinking in English(構想)	Mary E. Stowe, Eleanor Burnett, Mabel Field 英語教授研究所会長 (The Bulletin No. 3) 8月 「神戸女学院第49年報 大正12-13年」
1925 T 14 6月 講演(福井)"Concerning Pronunciation" 8月 軽井沢夏期講演会 11月 第2回全国英語教授研究所大会 "The Present Situation Regarding Reform" "The Six Chief Reform Principles" English Through Actions Concerning Pronunciation English Phonetic Diagrams The Principles of Phonetic Notation Progressive Exercises in the English Phones T The Standard English Readers for Beginners T Graded Exercises in English Composition(全2巻)	8月 「神戸女学院第50年報 大正13-14年」 Mary Stowe, Grace Stowe, 西村まさ, 曾木喜久 軽井沢夏期講演会に出席 (The Bulletin No. 17)
1926 T 15 1月 講演(東京) 2月 講演(東京) 3月 講演(大阪)(朝鮮)(満州) 4月 講演(東京) 10月 第3回全国英語教授研究所大会 12月 講演(東京) T English Through Questions and Answers(全5巻) 第1巻 "The Reader System"(教科書に関する構想) "The Right Word"	3月30日～4月3日 J. V. Martinの英語講習会が学院で開催される(『めぐみ』Vol. 6)
1927 S 2 1月 講演(長崎) 2月 講演(東京) 7月 講演(軽井沢)"The Teaching of English in Japan" 10月 第1回英語教師研修会(東京) "Modern Language Teaching" 第4回全国英語教授研究所大会 "The Reformed English Teaching" "The Five Speech-Learning Habits" "The Reformed English Teaching in the Middle-Grade School" "The New-Type Examination" Classroom Procedures and Devices "What to Do and What Not to Do" T The Standard English Readers(全10巻)刊行始まる	Mary Stowe第4回全国英語教授研究所大会に出席 (The Bulletin No. 39 付録)

Palmer と英語教授研究所の主な活動		神戸女学院と Palmer/英語教授研究所
1928	S 3 1月 講演(京都)(神戸) 2月 講演(東京) 4月～6月 新教授法講習会 7月 夏季講習会(文部省主催)"新教授法について" 10月 第5回全国英語教授研究所大会 Automatic Sentence Builder 『自動英文構成器』 『機構的英文法』長沼訳 『機構的文法解説』長沼訳 『初等英文構成練習書』長沼訳	
1929	S 4 10月 第6回全国英語教授研究所大会 The First Six Weeks of Englishの日本語版『英語の六週間』 『英語の第一週』	2月25日 Palmer来院 視察(『めぐみ』Vol. 14)
1930	S 5 3月 講演(大阪)(神戸)"How to Learn Conversational English" 10月 講演(大阪) 第7回全国英語教授研究所大会(23日～25日) T The Standard English Readers for Girls(全5巻) 刊行始まる [First Interim Report on Vocabulary Selection]	6月27日 Mary Stowe教授法研究のため青山学院へ出張 10月22日 曾木, M. Stowe, S. Field英語教員大会へ出席 (『めぐみ』Vol. 17)
1931	S 6 5月 教員研修会(大阪) 公開授業(4日～6日) 10月 第8回全国英語教授研究所大会 T "English as Speech" series(全12巻)刊行始まる The Technique of Question-Answering [Second Interim Report on Vocabulary Selection]	5月 Palmer大阪近辺の数校で 公開授業と講演 (The Bulletin No. 74) 5月7日 Palmer 学院で英語教授法実演と講演 (『めぐみ』Vol. 18)
1932	S 7 10月 講習会講師"The Fundamentals of English Teaching" 第9回全国英語教授研究所大会(14日～15日) "Simplified English" series(全3巻)刊行始まる The Grading and Simplifying of Literary Material On Learning to Read a Foreign Language T The Abridged Standard English Readers(全5巻) 刊行始まる [SSSF Patterns] [The First 6000 English Words]	10月14日 保田 英語教授研究会大会へ出張 (『めぐみ』Vol. 21)
1933	S 8 10月 第10回全国英語教授研究所大会 "A New Classification of English Tones" [Second Interim Report on English Collocations]	
1934	S 9 9月 渡米Carnegie Conference出席 10月 第11回全国英語教授研究所大会(18日～20日) "Ten Axioms" The First Six Weeks of Englishの英語版 [Specimens of English Construction Patterns] [The Standard English Vocabulary(100 word radius)]	10月18日 Mary Stowe英語教授研究会へ出席 (『めぐみ』Vol. 25)
1935	S 10 5月 渡米 Carnegie Conference 出席 10月 第12回全国英語教授研究所大会	
1936	S 11 3月 所長辞任 婦英 10月 第13回全国英語教授研究所大会	

T : 教科書

[] : 語彙, 連語, 文型選択に関する出版物